

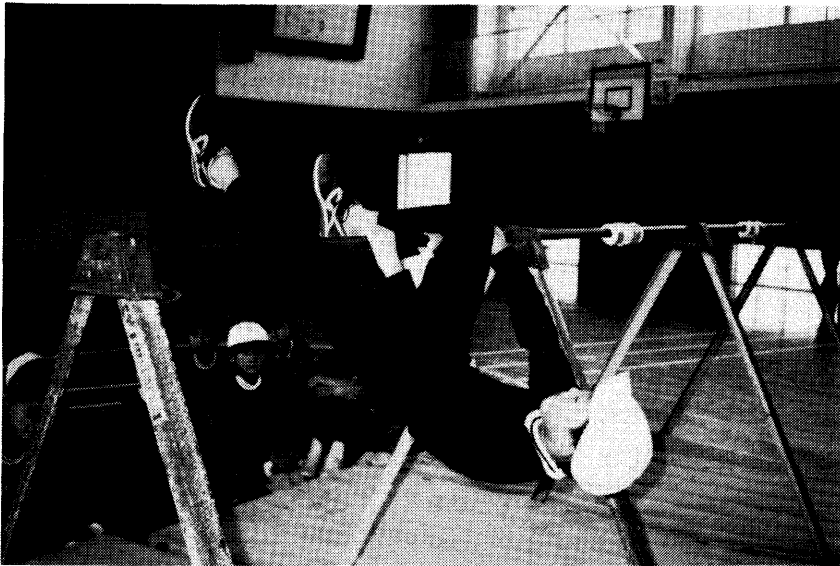
体育科におけるずれを生かした 影響関係の高まりのある授業の実際

上 村 義 夫*

I 体育の授業における期待する活動の様相

体育の授業において「予測と実践とのずれ」を生かした実践について、抽出児康夫の追求の例で述べる。

- 単 元 鉄棒あそび 一足かけ上がりー (第3学年) 本時 $\frac{2}{5}$ 時
- 本時の学習課題 ◎足かけ姿勢から起きるには、どのようにしたらよいか。
(写真①の姿勢から)
- 本時の主眼 ◎足と上半身の動きに着目させ、足と上体で大きな弧を描くように振ると上がりやすいことに気づかせ、足かけ上がりができるようにさせる。



写真① 足かけ振り上がりの初め姿勢

(1) 康夫の成長への願い

康夫の動き方、考え方の傾向性を次のようにとらえた。

- つまずきの解決法を探るときは、試技での体感をもとに、部分の動きに着目して探り出そうとする。

そして、自分が発見したやり方にこだわり、友だちの動きや考えのよさを受け入れて、自分の動きに生かそうとすることに、弱さの見られる子ども。

* 新潟大学教育学部附属長岡小学校

- 部分の動きと部分の動きを関係づけて運動することが少ない。
そのために、動きの高まりが遅くなったり、滑らかな動きにならなったりすることが、まま見られる子ども。
- 友だちより鉄棒が上手になりたいという強い願いを持っている。
しかし、自分の動きのつまづきを確かにとらえて練習することが少なく、沢山練習すれば上手になれると考え、繰り返し繰り返し練習しようとする子ども。

このような康夫に

「つまづきを解決するとき、友だちの動きや考えのよさを受け入れ、解決法をしっかり持って、動きと動きを関係づけて練習する康夫。」に成長して欲しいと願った。

そこで、本時の康夫の主眼を

◎「足だけ振っても起き上がれないことに着目させ、頭の振りを使い、膝を伸ばして足を振り下ろすと、体が振り上がっていくことに気づかせ、頭と足を滑らかに振った足かけ上がりができるようにさせる。」と設定した。

(2) 康夫に期待する活動の様相と教師のかかわり

本時、この主眼を達成するために、康夫に期待する活動の姿を『獲得の仕方の異同に目を向け、自他の動き方や考え方で欠落しているものを探り、獲得の仕方を見直そうとする。』という、影響関係が高まる「2の場」の着眼点を手がかりに、(表①)次のように描いた。

表① 体育科における影響関係を高めるための教師のかかわりと着眼点

場	着 眼 点	影響関係を高めるための教師のかかわり
1. 運動に対するつまづきや疑問をとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自他の動き方や考え方を比較し合い、異同やつまづきをとらえようとする。 ○ 運動のイメージと自他の動きとの違いを出し合い、問題を明らかにしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運動のイメージを持たせるために、動く教材の提示や試技をさせる。 ○ 運動のイメージと実際の動きの違いをとらえさせるために観点を与えて試技をさせたり、動きを見せたりする。 ○ 自他の動きや考えの相違が見えるようにするために、相互に動きを見合わせたり、動きを模倣し合わせたりする。 ○ 問題を鮮明にさせるために、自他の動きで気づいたことや不十分さをとらえさせる。
2. つまづきやある動きの解決法を見直す。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自他の動きの違いに目を向け、動きの獲得の仕方を探ろうとする。 ○ 獲得の仕方の異同に目を向け、自他の動き方や考え方で欠落しているものを探り、獲得の仕方を見直そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 獲得の仕方を探らせるために、動きや考えを意図的に取り上げ、対立させたり、補ったりさせる。 ○ 考えを鮮明にさせるために、試技や動作化をさせて、考えを述べさせ考えと動きをつなげさせる。 ○ 獲得法の異同を整理し、自分の立場をはっきりさせて獲得の仕方の有効性を吟味させる。

<p>3. 相互に批評し合いながら、構成する。動きを見直し、獲得法を再</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 動きや考えのよさを自分のつまずきに合わせて取り入れ、確かな動きを獲得しようとする。 ◦ 自他の動きの高まりの違いに目を向け、新しい視点から動きを獲得しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 動きに合ったやり方を探らせるために、指摘されたことや記録をもとに、動きの高まりとやり方の関係を見直しさせる。 ◦ 願う動きと実際の動きの異同をとらえさせるために、動きを見合う観点や評価基準にそって批評し合わせる。 ◦ 観点を変えて動きを追求させるために、見逃している動きを提示、指摘したり、つまずいている動きはどこかを問いかけたりする。
<p>4. 獲得した動きを確認する。新しい動きを探る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 獲得できた動きとできなかった動きを鮮明にし新しいつまずきを見い出そうとする。 ◦ 獲得した動きをもとにより発展できる動きを探ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 新しい問題を持たせるために、新しく条件を附加したり観点を変えて試技をさせ、不十分な動きをとらえさせる。 ◦ 動きの高まりをとらえ、より発展させるために、試技を見合いよい動きを見取らせ、何が契機で動きが高まったかを振り返らせる。 ◦ 工夫する余地に気づかせるために、互いの動きの高まりの異同をつかませ、獲得のし方をふりかえらせる。

(ア) 康夫に期待する活動の姿

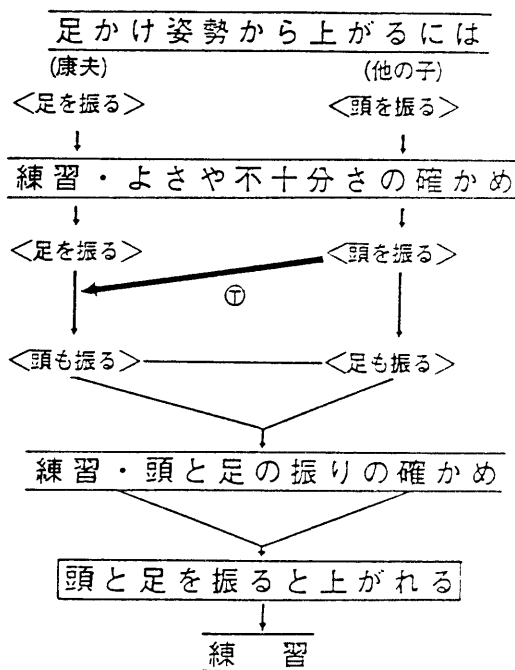
片足かけ姿勢からの上がり方を、康夫は「足を振って上がる。」国夫たちは「頭を振って上がる。」というやり方を持ち出し、それぞれが、試技をして確かめてみようとなる。

康夫は「足の振り」のよさを確かめようと試技を繰り返す。しかし、上がれない。それでも「足だけ振れば上がる。」と考えつづける。

しかし、「頭の振り」のよさを強調する国夫たちの考えを聞いたり、頭を振って上がる試技を見たりして、「頭を振る」考えのよさを、確かめてみようとして再度試技を始める。

試技後、康夫は、自分の上がり方には、「頭を振る」という考えが欠けていたことによりやく気づき、頭の振りを取り入れて練習し、頭と足を大きく振れば、足かけ上がりができるようになる。という考えにまで高まることを期待した。(図①)

図① 期待する活動の様相



(イ) 仮説としての教師のかかわり

期待する活動の姿を生み出すために、「2の場」の影響関係を高めるための教師のかかわりの仮説(表①)の

① 動きや考えを意図的に取り上げ、対立させたり、補ったりさせる。

② 試技や動作化をさせて、考えを述べさせ

考えと動きをつなげさせる。

を手がかりにし、次のように具体的にかかわっていくことにする。「貴子さん、あなたは、どういうやり方で練習したんですか、聞かせて下さい。」と意図的に指名する。

また、「一隆君、鉄棒でやっごらん。」と働きかけて試技や動作をさせ、考えを述べさせる。

このような教師の具体的なかかわりを大切にして、子どもたちに接し影響関係を高めようと計画した。

II 体育科におけるずれを生かした授業の実際

前記のように期待する活動の姿を描き、教師のかかわり方を準備して授業にのぞみました。実際の授業において、康夫がどのように追求したかを、次に具体的に述べる。(図②)

(1) 康夫の追求の姿と教師のかかわり

学習課題に対し、国夫は「頭を重りにして前後に振る。」と発言した。それに対し、康夫は「足を伸ばして振る。」と発言してきた。

その後の話合いで、「頭を振るやり方」と「足を振るやり方」が鮮明になった。

そこで、これらのやり方の、よさや不十分さを、試技を通して確かめさせた。

康夫は、足を大きく振って上がろうと練習を繰り返していた。しかし、振り上がれなかった。

ところが、何回目かの練習のとき、大きな足の振り下ろしから、上体が振れ上がっていく動きをみせた。

このとき、康夫は「先生、わかった、鉄棒を手で軽く握ると大きく振れる。」と私に語りかけてきた。

私はこれを聞いて、康夫は足を大きく振るために、手の握り方に着目してきたなど考えた。

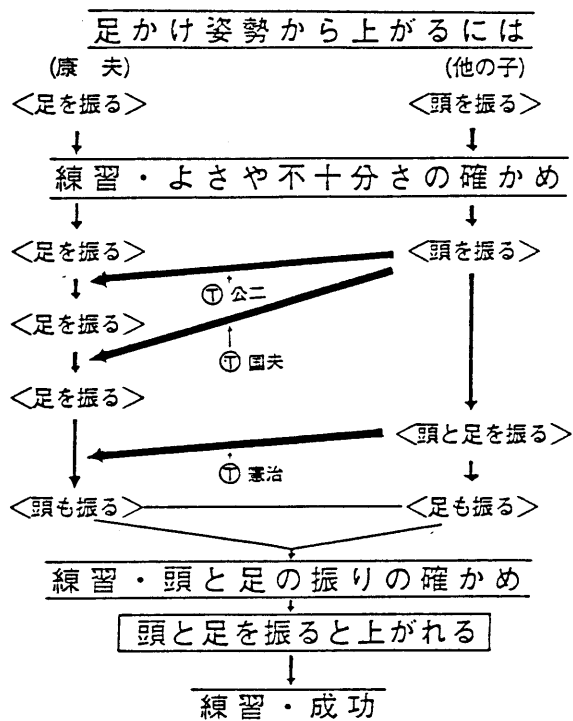
練習後の話合いで、康夫が「鉄棒を軽く握ると上がれる。」と述べると、穂文がこの考えを支援してきた。

康夫は、穂文に支援され「足を振る」という考えに益々自信を強め、自分のやり方で欠けている「頭の振り」に目を向けようとはしなかった。

そこで、足を大きく振るには、頭も大きく振る必要があることに目を向けさせるために、教師のかかわりが必要だと判断した。

そこで、練習の時に、頭の大きな振りから振り上がっていた公二に、「公二君は上がれましたね。

図② 実際の活動の様相



どうやったんですか。」と意図的に指名した。公二は、「いったん、頭を振り子みたいに下へ振って、頭にスピードをつけて上がる。」と述べ、試技をし振り上がってみせた。だが、

康夫は、公二の「考えや動き」に関心を示めさず、公二の試技をチラッと見ただけだった。

康夫に「できたよ。」という考えを聞かせたり、「できる動き」を見せれば、「頭を振る」ことのよさに目を向けていくのではないかと考えていた。

しかし、康夫は「頭を振る」やり方のよさに目を向けようとはしなかった。

それは、頭を振るよさのわけがらが、はっきりととらえられなかったために、目を向けようとしなかったのではないかと考えた。

そこで、日頃から解決の仕方を書くとき、わけをつけて説明し、級友に説得力のある国夫に、頭を振ることのよさのわけがらを述べさせようと考え、国夫を指名した。

ところが、国夫は私が期待していたこととは逆に、「僕は、頭を振って上がろうとしたんだけど上がれなかった。」と述べ、つづいて、両足を組み合わせ、頭だけ大きく上下に振って上がろうとする試技をした。（写真②）



写真② 足を組み合わせた国夫の振り

この国夫の試技を見た康夫をはじめ、多くの子どもたちは、国夫の足を指さしながら、「足がバツテンになっているからだめだよ。」とか「足を伸ばして振ったら。」と声をかけていた。

私は、子どもたちのこれらの指摘を聞き、康夫は足だけ振れば上がる、という考えをより強めてしまったと見取った。

また、他の子どもたちも「足を振る、頭を振る」と、部分の動きのみに目を向けつづけており、頭と足の振りを関係づけて、考えようとする動きが見られなかった。

このような、康夫の姿や他の子どもたちの姿は、予測とずれた動きであり、私は困ってしまいました。どのようにして、この予測とのずれを縮めようかといっとき思案した。

以前、康夫は、自分の考えが否定されたときは強く抵抗したが、自分の考えは間違いではなく、友だちの考えも大事なんだとわかったときは、友だちの考えを素直に認めたことがあった。この傾

向性に竿をさせば、頭の振りに目を向けていくのではないかと考えた。

そこで、国夫の試技を見たときの憲治の、頭の振りと足の振りを関係づけたつぶやきを提示すれば、「頭の振り」のよさに目を向けていく康夫になるのではないかという見通しをもって、「憲治君の考えを聞いてみよう。」と意図的に憲治を指名した。

憲治は、「僕は上がれなかったんだけど、頭を振り子のように振ると、足を伸ばして振るのを一緒にして振るとできるみたい。」と述べ、試技をした。（写真③）



写真③ 足と頭を振る憲治

この試技を見た由佳や正人が、憲治の考えのよさを、試技をしながら支援してきた。

康夫は、この憲治や由佳らの試技を、今までに見せたことのないような真剣さで、体を乗り出して食い入るように見たり、考え込んだりする姿を見せた。

見終わると「はやくやりたい。はやくやりたい。」とつぶやいていた。

私は、このつぶやきを聞き、康夫は自分の上がり方に、「頭の振り」が欠けていたことに、目を向けたと判断した。

そこで、「頭も振る」よさを、体で感じさせるために、練習をさせた。

練習を繰り返していた康夫が、私の所へ走って来て、「先生、やってみてよかったんだけど、頭と足がついてくるように振るといいみたい。」と勇んで語りかけてきた。

練習後、康夫は元気よく挙手をし、「頭と足の両方を振る」よさを述べてきた。

その考えを穂文等に支援され、自分が見直した上がり方に自信を持って、練習に取り組み始めた。少しずつ頭と足の振りにリズムが生まれてきた。（写真④）

6回目の練習に入るとき、貴子や正人に、「もっと頭を下まで振ったら」と声をかけられ、みごとに振り上がることができました。



写真④ 頭と足のリズムカルな振りになった康夫

以上、この実践の中で見られた康夫の姿は、本時、康夫に向けた願いに接近した姿であったと評価した。

教師が、ずれを生かそうとして、憲治のつぶやきを意図的に取り上げることができたのは、康夫に期待する活動の姿を、具体的に描き、教師のかかわりの仮説を持っていたからであると考えられる。

(2) 影響関係を高める教師のかかわりの見直し

本時、影響関係を高めるために、有効であった教師のかかわりは、次の3つであると考えられる。

- 試技の機会を多くし、体感を通してやり方のよさや不十分さを、考え合わせたこと。
- 公一や憲治を指名したように試技時に見取った動きや考え、つぶやきを意図的に取り上げたこと。
- 考えを動きの姿としてとらえさせるために、試技や動作をさせながら考えを述べさせたこと。

本時の実践における具体的な教師のかかわりと、日常実践での教師のかかわりを重ねて検討すると、

表② 体育科における影響関係を高めるための教師のかかわりの修正

影響関係を高めるための教師のかかわり
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 獲得の仕方を探らせるために、動きや考えを意図的に取り上げ、対立させたり、補ったりさせる。 ◦ 考えを鮮明にさせるために、試技や動作化をさせて、考えを述べさせ考えと動きをつなげさせる。 ◦ 獲得法の異同を整理し、自分の立場をはっきりさせて獲得の仕方の有効性を吟味させる。
↓
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 獲得のし方の手がかりをふくらませるために、試技や動きを見合う機会を多くし、互いの動きのよさや不十分さを見つけさせる。 ◦ よりよい獲得のし方を探らせるために、動きや考えを意図的に取り上げ、見逃している視点を与えたり、対立させたり、補い合わせたりさせる。 ◦ 考えを鮮明にさせるために、試技や動作化をしながら説明させ、考えを動きとつないでとらえさせる。

教師のかかわりの仮説は有効であったと考える。

しかし、この実践研究で、

『獲得の仕方の手がかりをふくらませるために、試技や練習を見合う機会を多くし、互いの動きのよさや不十分さを見つけさせる。』

という、新しい教師のかかわりがあれば、2の場における影響関係をより高めることができると考え、新しい仮説として設定した。(表②)

Ⅲ ずれを生かして得たもの

予測と実践とのずれを生かしながら授業を展開し、本時の授業から次の2つのことをとらえた。

- 康夫について、新しいとらえを見出すことができた。
それは、友だちの動き方のわけがらをはっきりとらえ、体で感ずることができると、そのよさを受け入れて、動きを高めようと努力する子どもだ。
また、康夫の考えを認めてやりながら、新しい視点を与えると自分の考えを見直し、動きと動きを関係づけて練習のできる子どもであると、とらえ直した。
- 本時の主眼の達成を見通しながら、康夫の追求の姿を手がかりに、憲治の考えと動きを提示したように、康夫にふさわしい「教材の選択、提示」に生かすことができた。

授業は生きており待つてはくれない。一瞬一瞬の動きを、連続する追求の様相の中で評価し、本質的なずれなのかを判断し、適切な教師のかかわり方を瞬時に決めて、かかわらねばならないむずかしさがある。

それ故に、今後も影響関係を高め、個の成長を促すために有効な教師のかかわり方を、追い求めていきたい。